

清央小だより



令和7年度 第38号
2026. 3. 11

HP > <https://www.ueis.ed.jp/school/kiyohara-c/>

教育目標	「夢いっぱい 友だちいっぱい 清央小」
	・自ら学び工夫する子ども (考える)
	・元気でがんばる子ども (鍛える)
	・礼儀正しく思いやりのある子ども(思いやる)

※ 本文は、ユニバーサルデザインのフォントを使用しています。

※ 学校の様子はホームページにも掲載しています。その際は、画像を一部加工することがあります。ぜひご覧ください。

記憶と記録

～東日本大震災から15年～

2011年3月11日(金) 14時46分 ―。

今までに感じたことのない揺れは、誰もがただ事ではないと感じるには十分な大きさでした。テレビの画面はすべて地震情報に切り替わり、その後、画面から流れる現実とは思えない津波の映像…。そして、福島原発の事故保護者の皆様は、あの時、どこで、何をしていましたか？

あれから15年目の節目となりました。その記憶を忘れないために、当時大きな被害を受けた本校の画像と、新しい校舎が完成するまでの間、本校の全児童を受け入れて授業を行ってくださった、当時の清原中学校の校長(元本校校長でもある)の倉田明男先生が令和2年に振り返って書かれた記事を掲載します。(2ページになります。)ぜひ、お読みいただき、清原地区が一丸となって震災を乗り越えていった一面をお感じいただければと思います。



校舎内は天井や壁が剥がれ落ち、校舎と校舎の間には段差があるなど、歩行は難しい状態だったようです。

大谷石の壁がずれてしまっています。



端が曲がっています。



アスファルトにもあちこちにヒビが。



(AIにて画像から文字起こし)

令和2年7月27日 日本教育新聞関東版記事 (写真は本校で保存されていたものを追加)

汗と涙と感動の108日間の合同生活 — 3・11の体験から —

震災当時宇都宮市立清原中学校長 (元清原中央小校長 H16・17年度)

倉田 明男 先生

岩手県、宮城県、福島県を中心に今もなお大きな爪痕を残す「東日本大震災」。当時、私が勤務していた宇都宮市の東部に位置する清原地区も被害があった。学区内の小学校の校舎の一部が壊れて使用できなくなってしまう、市教委から「何箇所かに分けてでも早く授業を再開したい。中学校でも受け入れてくれないか。」という要請があった。児童、職員が分散して学校生活を送るには様々な問題があるのではないかとこの思いから本校で全児童を受け入れることにした。千人を超える大所帯となるため、スペースにも限りがあり、まず教室等をどうするかという問題に取り組んだ。そして校長室と女子更衣室以外は全て小学校に開放することに決定した。修了式までは徒歩で通学した。その距離は片道7kmにもおよぶ児童もいたという。この課題は子供会育成会の要望に行政がすぐに対応しスクールバスでの送迎が実現し解決した。新学期を迎えて合同生活がスタートした。

始業式は体育館の前方に小学生、後方に中学生が並び小中合同で実施した。職員室は別々にし、多目的ホールには机が並び教務室に姿を変えた。音楽室は3クラス(97人)合同の教室となった。縦長のため先生は前、中央、後ろに位置し、ハンドマイクを使用しての授業となった。一日が終わると声がかれていた。授業時間は開始のチャイムのみとし小学生は残りの5分間は次の授業の準備に充てることとした。給食時間も調整し、トイレの使用場所も別にした。休み時間に利用する校庭の場所も区切ったが、気づくと小学生が全面使用していて中学生は端の方に追いやられていたが中学生からの不満はなかった。7月に入り、小学生の部屋にはエアコンがないため、中学生もエアコンの使用をしないことになった。それらの中学生の優しさ、思いやりに感心した。



思わぬ合同生活ではあったが、小学生の音楽の授業の歌声に癒されたという中学校の職員や、立派に成長した中学生を見た小学校の担任の笑顔も見る事ができた。小中学校の授業も互いに参観できた。先生方は発達段階に応じた指導方法や子どもを見る観点の違いなども様々な場面で見聞きすることができ、それぞれの文化の違いを知り、それらが小中一貫教育の原点であることを知る貴重な経験もできた。

最後の日は「さよなら がんばって」という看板をベランダに設置し、吹奏楽部の演奏と全生徒が教室のベランダから手を振って送り出すという感動的な場面も見られた。これまで経験したことのない汗と涙と感動の108日間であった。

9年前の記憶が今でも鮮明に思い出されるのは、様々な困難を小中学校の職員と保護者、地域の理解と協力、そして市教委との連携や行政の迅速な対応で乗り切ったという達成感があったからだと思う。この先、学校はいつどこで自然災害等に見舞われるかもしれないが「地域の宝である子どもを犠牲にしてはならない」というキーワードをあらためてこの時の体験を通して伝えておきたい。

※ この記事の切り抜きは、現在、校長室に掲示されています。

(文責 校長)